時間の花

大黒　妃七子

私がこの本に出会ったのは、中学一年生のときでした。本屋に行ったとき、母がお気に入りの本だと教えてくれたので買って読んでみることにしました。しかし、読書があまり好きではなかった私は、三回ほど読み直してもいつも同じところで読むのをやめてしまっていました。そこで、これを機にこの本をもう一度、今度はしっかり読んでみようと思いました。

この物語の主人公は、不思議な少女モモです。町はずれの円形劇場あとに迷いこんだモモは、町の人たちと出会い、みんなにとってなくてはならない存在となりました。町の人たちはモモに話を聞いてもらうと幸福な気持ちになったり、子どもたちに聞かせるための物語が次々と思い浮かぶようになったりしました。そこへ、「時間どろぼう」の男たちの魔の手が忍び寄ります。人間一人ひとりの「時間の花」を、モモと、これはまた不思議なカメのカシオペイヤが魔の手から取り返すために協力し、人間たちのためにがんばります。

この物語は、「時間」と「幸せ」という私たちが日常で何気なく

感じているものについて深く考えさせられます。現実ではありえないようなストーリーでも、どこか現実を感じるところがあり、知らぬ間に物語の中にひきこまれていきます。

「時間」とは一体何なのでしょうか。この本を読むまではそんなことを考えたことがありませんでした。同じ一時間でも、楽しいときはあっという間に過ぎ、退屈なときは長く感じることを不思議に思ったくらいです。この物語は、人間が「時間どろぼう」に時間を奪われていきます。時間を奪われた人間は、無駄な時間を過ごさないために大変せっかちで、けちで、小さな人間になってしまっています。モモのお友達もそうでした。ジジとベッポは、遊んでくれないし、楽しいお話も聞かせてくれなくなりました。仕事が忙しいというのです。町の子どもたちも、もう円形劇場あとにお話を聞きに来てはくれませんでした。時間を奪われたみんなは、もう以前のような笑顔はありません。まさに、顔が死んでいるのです。私の普段の生活と、それは重なることだと思います。例えば、学校に行く日の朝です。準備がギリギリになってしまい、時間に余裕がなく、また、その心にも余裕がないのです。そんなことはわかっていると思っていても、大きなことだと思います。

私はこの本に教わりました。時間のゆとり、心のゆとり、幸せ、これは全てイコールでつなぐことができる、ということをです。これに気づけた私は、きっとこれからが変わる気がします。日々の時間に対する考え方、過ごし方などが変わっていく気がします。それが私の人生を大きく変えることでしょう。『モモ』が私の人生を変えていくでしょう。

また私は、「時間の花」についてどこか現実味を感じます。今私たちがいる世界にもこの花が存在しているように思えました。花びらの数が寿命。そう考えると、生き方に対する態度、そういったものが変わるのではないでしょうか。花びらが散るその瞬間を実際に見たことがおそらく私はないですが、花びら一枚一枚が人生の時間ならば、花びら一枚一枚を大事に散らしていこうと思いました。きっと気づけばまた一枚散ってしまった、という感じであっけなく無くなる花びら。その一枚に重みがあるように、意味があるように、色や香りがあるように生きていくべきだと思いました。

小さな少女モモの不思議な力は、みんなに「時間」というものを教えてくれました。物語の中の人たちだけでなく、この本の読

者にもしっかりと伝えてくれました。モモに教わったからには、私は変わらなくてはなりませんし、きっと変わります。私は今、幸せでしょうか。この物語の「時間」という観点からすると、きっと私は何かに時間をうばわれて「顔が死んでいる」状態でしょう。これからの生活は、無駄な時間を作らないようにしていきたいです。忙しい高校生活でも、勉強も部活も精一杯取り組み、「幸せ」な人生を送ることができたらいいです。あたたかな仲間に囲まれ、愛されてきたモモは、私にもその「幸せ」を分け与えてくれました。この本を手に取った中学一年生のころ、この本を読んでいれば、私はどう受け取ったでしょうか。きっと今とは違う受け取り方をするか、あるいはモモの教えに気づかないままでいたことでしょう。そういうことなら「今」読んで学べてよかったです。今の自分は、計画を立ててもその通りに実行できず、結局は時間に悩まされてきました。まずは心を落ち着かせ、ゆとりをもってから全てを見直していきたいです。そしたら、自然と笑顔が増えていくと思います。モモの教えを生活に生かせることができるなんて、幸せですね。

大人になったら、もう一度モモに教わりに行きますね。